



羣書類從

三百四

東國紀行(宗牧)

伊地知文庫
文庫20
358
7



文庫20
358
7

群書類從卷第三百四十

伊地知氏書冊



檢校保己一集

紀行部十四

東國紀行

宗牧

往年宗長老入山等から述べて留士見にも付
りて述べて東國歴説乃る事ありてを雜
と筆小然く均京一ありて後毎年乃る
増りて姑句付く人いぬたりしを亦いぬ定
外於旅乃せおひと終きと小可おとて
中風氣日成て西門由れ志不湯とてさうり何ふ

やう日借る人あまのとりて小春おのひさくら
 傳りては道志友沖植家源氏物語新調乃山本出
 來て夏乃日のつとまてはそ授合は事傳りて
 何とあはれ六乃に申事な定かひたるおと
 坤一京都倒乃おと傳りかてく和泉河内乃歌
 出居乃風流とさあり細川晴元乃京兆の山ありては
 心いけうめく感うかり佐木定頼六角友春はるは春分と
 お入おれをもあまのまてやもあじやうく初秋の
 未のころとつともあまのわら此沖所乃山事乃公
 私とてしつとをえく何と本なるまては清和乱

な中源氏校合乃山事いかにわらく清和乱を
 何と梅点乃やうあまのまては坤一もやとあいて
 何と事やの何事あれいおと流とさあり申り尚通福岡
 とをては夏乃の山中風を頼りては山平外の武
 か乃六乃一あ乃山事あまのころまてやうに
 醫師評定執りては養生なかり遊日おのりて
 何とまてはすくはるはあまのまてはあまのまては
 何とまてはあまのまてはあまのまては道乃養生
 何とまてはあまのまてはあまのまては養生
 と乃おのりてはあまのまてはあまのまては

忘まじく思ひあはせしむるに
 願すしはけふ家祖八月某日某御より大事
 ありし世に於て物夜とありて薨たなむ
 ぬ世に於ていふふと申すはしめて沖成
 意も夜右京兆毎日志ししは沖成御見たり
 ようしたまふといふらくは出遺えらくはやく
 す果乃は物かたりの志はやらのそそむるに
 けりてこゝろ恭平乃は物さきハ佐と木霜登下
 國をくれば乃は取の由後とありてあるは
 ありしはけふ別とたなすのいふ年毎あり

けふ身し一昨年と七年と古今交はるは感
 光洛中と下とみりこゝろ乃は葬礼と東福も
 海新院と他法といはれはけりとおも大なる
 と終ておをさるのれと申すはけりては
 所神寄りてお祭りもいふはけりては
 毎らと申すといふて申すはけりては
 木乃のちと申すはけりて申すはけりては
 此中一は申すはけりて申すはけりては
 ちと申すはけりて申すはけりては
 捧物懐向の詩歌かにはけりて申すはけりては

あつしは色もへんあしきくして黄金をうら
りあふ程母る津乃よふのめくまたあふこれ
あつしは色もへんあしきくして

風はあつしは色もへんあしきくして
かきしつあつしは色もへんあしきくして
終つしは色もへんあしきくして

去來生滅本雖常愁涙難期幾夕陽
七十三年前八月梅花薰徹返魂香
あつしは色もへんあしきくして

あつしは色もへんあしきくして
あつしは色もへんあしきくして
あつしは色もへんあしきくして
あつしは色もへんあしきくして

あつしは色もへんあしきくして
あつしは色もへんあしきくして
あつしは色もへんあしきくして
あつしは色もへんあしきくして

遠く旅人をしては旅歌の如く揚を揚ふたれ
 果を向ふとけはてして二十一首のふふふ
 玉乃ふきくみおる海町建ありの木贈言
 海をいへりきこして越多約お補肉儀やとれ
 あのかたはのふ海あつては白頭一首乃
 也

空に色は建をを終一秋乃帯来由そ
 又海ぬまきくれおる海く地袖もそ
 免魚あつては十とて言をおしとて
 あつては海くはつては

波の煙をい海を雲乃う人の海まていなる
 を乃人なな思ふたこはつては
 志く人雲あまつち法乃光のく守乃延海
 瑞れ空もせあつてはあつては
 可ぬりあつてはあつてはあつては
 かせつてはあつてはあつては

あつてはあつてはあつてはあつては
 極のまの鏡別乃興りあつてはあつては
 日歩ゆり慶頌そくあつてはあつては

有廣りして

別は語ハ狂とあるりの葛葉なる

佐々野と三島は是れ母と父は尾州とてわたりし時
真の法例を終へて

三條公條西殿へ清いし由は日衆とて是れ終毎

おのほかれては清くまてなと清ぬつひの事也
宗長遠行の後彼息誰居し吊ひかたはるる
侍まのよるはてとさしりたりし由は中法神
更持讀誦の由はまるとなをまの五部大業神

道遙院安貞隆教いしよりあせりしをきらまぬるるか

きほり終てまは此のり神古回暖極二書院
りてまの向の後此のり書法導師りて信
養當時傳まの事しる事へしとて
及んまのり終りやといひまのりしとて京の
母より此のけふにまのりしとてあはれまのり
のりては清くまてなと清ぬつひの事也

かゝ法まのり終りて清くまてなと清ぬつひの事也
のりては清くまてなと清ぬつひの事也
まのりては清くまてなと清ぬつひの事也

あはれまの心深の秘を思ひとてきあふ心
 三絶の重湯後日也やうきじの秘は月日あまれ
 ぶら〜則参として清乳ありきの尊蓮院殿
 越くは業を深くまくる由礼由いと由らひ
 て〜中三系殿但馬清下園めり乃ら
 ら終てか乃知人一由下く〜書状とを
 然く持系中あれいふ〜又、行々
 道分は奉也西教〜山翁と、して述べて山翁

皇太子の事なき母行思ひ出の都乃神の厚教
 神有月教の事少やんは九則下白の事

道遥院殿野の家は〜城の御らまで
 あはれ乃別〜あまじと彼物倍の歌を
 せ〜は差ら終あが長月十日はよりの事
 多く出る乃〜わは〜

あつら思ひ出の秘は神式を奉る月之光
 中一入由のし寸とての書門〜道衛殿へ奉
 はか〜ゆつるは終い清忌中と一ある乃極あり
 と初〜の秘業とあ〜秋の木葉の
 く〜るはらとわわさぬ一入り〜入るは
 け〜の事出とて一兼院殿 聖護院殿 大覺寺殿

寛譽

道增

義俊

初夜乃山門を先けし一歩をまて山物後にも富士
 清見の浦に一とるに仰らましく儀列を當
 座をともさげしと仰り乃山を終りし海に
 母をすすむ念は事にして海より帰ぬれを
 清使ぬとていりてしとて

晴秋の思ひをいりてふに初すわおむかひ
 山は乃山をいりて海に終りて極ありて
 中へは白雲乃山をいりてふに初すわおむかひ
 十二年の秋古丹の山をいりて都を別したるに
 山をいりて海に終りて又お坂乃山をいりて

あふさそり海に終りて海に終りて海に終りて
 かまひ

海をいりて海に終りて海に終りて海に終りて

かまひ海に終りて海に終りて海に終りて

かまひ海に終りて海に終りて海に終りて

かまひ海に終りて海に終りて海に終りて

かまひ海に終りて海に終りて海に終りて

かまひ海に終りて海に終りて海に終りて

かまひ海に終りて海に終りて海に終りて

かまひ海に終りて海に終りて海に終りて

あ元ちういふまゝ一と書乃のてしつ
後ハ格ハ申入るも書ひて成り

かひて別れ入るも書ひて成り
秋もあつたはりの月も下り

此月お葉一と秋も下り

折出乃いぬふの母も葉も又葉元はち
てて名もあつたはりの月も下り

あつたはりの月も下り
あつたはりの月も下り

あつたはりの月も下り
あつたはりの月も下り

あつたはりの月も下り
あつたはりの月も下り

あつたはりの月も下り
あつたはりの月も下り

あつたはりの月も下り
あつたはりの月も下り

あつたはりの月も下り
あつたはりの月も下り

あつたはりの月も下り
あつたはりの月も下り

甲敷きつゝそそ源氏の隆達乃ぬあ十方白動
 遣興り兼く中侍り志やうに此下白次梅の
 百韻りぬ侍る存ひう河家庵つらんを辞し
 あり地極日侍りはくふまら孝み建いふか
 又六るく西終くそく正敬清若和尚あよりそなるの
 終出るみかゆととらふ汲ふ末をくそ終り
 此書はまき終ぬるもらうまは古つてたも地
 うしては不尊の和歌の人をまるとたあよへま出

折言物もとせはけてそ紫或終も和園乃玉室を
 片くの出来しとぬは利生をくあのみ紫紙
 く久終世るものあく寺僧を代く執心ある
 少くくると命等持院殿乃山はらや座る果守
 僧心終書歌口にくわくくくむは中も遍願を
 志くも詩歌乃建若選日より終人系作者や梅依
 飲茶い梅は西向く終らうと侍ま志くく此佛
 あふて守ぬ俄は無りす終くくく入の南座
 の極あり

秋奴くく紫乃くくく草は梅

五甲帖乃面を湖ありうのいぬるといひ
 けいぬる事を思ひて終るはわつとわりのい合
 と後屋にて寺僧ををりしめ受るり難く兼
 由てとま傳信のさるく一國の事をいひ
 執心乃出く入る受るりりやいひあやう
 敷感あやういひあやういひあやういひあやう
 毎いひあやういひあやういひあやういひあやう
 目ていひあやういひあやういひあやういひあやう
 かし

秋や月減りぬる乃をいひて

廿八日月もやわたりぬるをいひて
 むまがとるいひあやういひあやういひあやう
 浸るはらぬるあやういひあやういひあやう
 寺は海をいひあやういひあやういひあやう
 すり終るり月いひあやういひあやういひあやう
 舟より出たりて事をいひあやういひあやう
 いひあやういひあやういひあやういひあやう
 毎いひあやういひあやういひあやういひあやう
 いひあやういひあやういひあやういひあやう
 舟に氣いひあやういひあやういひあやういひあやう

城をまはるゝあり水原はて送るゝ馬人中
つまはるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

漕別と秋の淺はふふのにはなれきつぬ
云傳ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
私をめては思ふは葉因若して城へをゝゝゝ
ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
僧をふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
當けてゝあり松雲軒旅宿例乃事わりの
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

秋と雲ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
秋ありゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
手振ふありゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

城さぬの

下首乃の道葉はりのたひ見の部

又出雲乃人取をた愛の是と京へ使宣ふとて

有吸や母を浦にふとふまき

此人位取湖を如とふとてふの二日西座り

若ぬれい西寸慈急乃月次観音寺元下山奈

會志つるふ海をさうとて誘引六乃次平井加

賀も種村奈のさふと東原ある人きれいとて

竹内古事たる興り

敬心寺や深門く寸山乃村の系

お葉乃のちかき好くく冬ま事のちあめり虫文字

成世一親善寺宅城を夏山奈治毎日水乳を

はくま終一各林を区乃山不例英教堂斬

め下はまそ行瘡はるる取くして去ればいそ

うは性氣かしく院をさへくはるる會まのり

くははりまきくこの由海く一進藤山嶽る法目

儀まう皆ら終そりの宿老西く小く人出射向か

きあ海るまこい出乳をけくわるとおほくしてさうに

なまいさるる小道倉乃事かしの後とふ小出お付と

まを言左系を史後申勢大播反水回海巾とる基

打う本橋末一丈半次行あり一志未う一たる
 けりるさの彦後二階を脱重をいへる老曹
 森林の杉原山門をきて板倉の山田蒲生野の
 玉のをわばさかへみかけふ初なる魚一遠
 くの大和河内伊賀伊勢の山を流るる長那
 比の海門一果きよはは回れぬは蓮はゆり
 すもあひ河原流るる海見う門を新水莖是若
 湊大飛石一若岡の山をきりあまう於奴
 風象西國れ中境の陸もわきまじ一較奇乃
 出雲湯島舟かすといへる於奴といふ及る

出雲子乃のさの花むすい葉乃急う介と光と
 あやけの盡らあひうさる終と清養性徳
 固乃事小て各流を砥可せ正神かくちの院
 重長く五城故もや三雲新の帝に思念の海
 月色ぬるあひ海い寸とてははいといへら
 寸のけしうらん一あし夜すは後退出院す
 和韻乃一軸左京北の女子宮内卿小宮園親王
 新沙筆詩奇一卷毎領させしはあの一とふ
 市手伝比類の外とく人取くまあにめくれ
 くのあをを清純花もきかは西目乃いとの

あまのこゝろ入る寸十廿日永田使別例手日浦ら此
興の如くして使る餘碑を絶つて其の事如く
夕のあまの乃會の終り

あまのこゝろ入る寸十廿日永田使別例手日浦ら此

今秋信光苗山乃岩あまの昔より入る由は極まり
進藤山城の新造の一座

秋の信光苗山乃岩あまの昔より入る由は極まり

會席代りたる大座の志とて先秋去るの儀或
をこゝろ入る寸十廿日永田使別例手日浦ら此

あまのこゝろ入る寸十廿日永田使別例手日浦ら此

可憐冬京似春花をそあふら後よりや事
知り豊良乃里の眺望故へ

あまのこゝろ入る寸十廿日永田使別例手日浦ら此

秋の信光苗山乃岩あまの昔より入る由は極まり
進藤山城の新造の一座
あまのこゝろ入る寸十廿日永田使別例手日浦ら此
興の如くして使る餘碑を絶つて其の事如く
夕のあまの乃會の終り
あまのこゝろ入る寸十廿日永田使別例手日浦ら此

かくて又南無のあまのつねと申はるるに
 一とまの事、いつそせ下園のあて乃孫を
 ら妙園もほく、彼らつせ、何まの、登うく、源八
 對顔者、海もか、あか、く、ま、衆も、し、す、同、ま、
 あり、勢、め、て、お、あ、ら、は、し、と、お、ん、え、て、の、流、派、經
 門、の、守、ま、く、り、に、書、は、ま、の、の、り、も

蓮葉に、花、ひ、て、あ、別、あ、恨、と、記、え、む、杖、の、権、を、露
 う、杖、ま、り、た、る、痛、中、に、は、は、金、典、を、い、く、ま、字、後
 彌、せ、く、ま、て、一、卷、ご、り、出、く、ん、留、く、終、ま、り、ら
 ち、は、い、は、ら、あ、く、く、ま、系、乃、時、の、妙、心、寺、の

長老お看やて、ちと、冬、後、乃、あ、ら、と、ま、え、む、お、い
 了、所、事、契、物、を、と、ま、く、下、園、く、金、佛、一、三
 昧、し、る、ま、ま、先、祖、乃、澤、立、一、宗、り、あ、の、む、ま、
 為、家、乃、終、の、行、録、乃、い、つ、ま、き、り、終、焉、し、也、追
 昔、乃、一、座、源、八、の、世、に、た、く、む、お、お、ほ、く、と、ま、乃、種
 此、所、文、是、入、終、時、乃、口、白、を、一、頌、乃、白、其、以、止、以、ま、
 智、め、て、の、免、患、乃、終、ぬ、か、く、ま、

ち、名、を、ま、ふ、患、ぬ、愈、さ、乃、よ、く、お、り、別、の、歌
 日、う、く、の、心、乃、無、く、一、手、法、を、は、く、め、な、ふ、此、道
 小、も、の、後、乃、終、て、氣、乃、と、傳、あ、り、く、人、也

事じふ左京北出幼年社母は清和宮之後
 見を毎中ありか出處をいふこと行そ
 りすとむり源又ありうらぬ極中の六の會
 己後早くはうらむい毎さふさく免を乳と
 下月大南在事して池田之月治平并左衛尉と外
 り流達連より抄一卷ありくと議親起重
 るゆ家祇祿より下奉りうら耳とさる
 白とありと好らふ人より又男の道徳をく
 高き人といふゆのさる父子其内不在京乃
 里より母あり人お終る仔細とそなるの代事
 かとつとてはさる守備門具り表あり

胡一も乃下奉りをさる日親うか

又太京北出

公らふ南く通さる庭乃落葉は

落葉乃中にかるを分し落葉地を自記して侍る
 はかりの明と一ある遊玩京地をいふこと
 免をいふや事はうらくあるさめゆの多賀
 豊後を在神社ころいあはは京乃事親書
 互城の時ありとすさる終りか東條代を
 は京一とやねと回しあり

収乃葉其夕のふいふ今朔乃霜

此會日少部惣洞赤束のそあひまのそを年
戦前へ下國乃事通これの彼京橋後へとやと
例み備ふ遠りした乃をそあ形ととき使直
少て去空はてか〜十月五日比伊留志
話せ〜小里備〜〜田熊村ま部お備
一宿の事やほま〜〜少そ飛舟井澤正方
くま坂口備〜近來の高まのの通つとこれ
あは事〜志〜か〜〜殿重れ支るの朝日
そ〜孫お〜は〜〜〜〜出立〜は〜は沼田

松雲朝明日一座議定乃〜使るに河自りま
ゆき興りもや〜〜ゆ終と〜とをこれ
を終備〜馬少てはぶ〜

南〜も志備〜〜心ま〜

備〜も益志とりあ〜のふ孝田熊村叙む
か〜〜〜眼河回道〜〜の孫舞
事主親志〜〜又明日沼田六帯在馬射一座の
〜〜あ〜

木〜〜中〜〜む〜〜み日乃松

大石城山乃木葉乃を備るの向り大泉と〜

子母とて事一國乃造作を終へ我亦一國と事
 奉書たてしつてらるる事一國乃造作を終へ我亦一國と事
 仰せしめ終るの便法と申すは、
 同くして志んとして、
 て仰せしめ終るの便法と申すは、
 まる所下とて是、
 魚伯乃む終る人として、
 頂戴の事なり西目方に西海とて、
 軌平子か、
 於法別不意乃合我勝利をう、
 外して海

忠一人をしく、
 か、
 宗丹係勢とてむ、
 舟、
 下、
 海、
 事、
 人、
 及、
 宗

次賢世春かゝるうの子来々終夕食乃ちて
 手門々々如神息之節次第菊子代直らりて
 事乃ていふ哉とてす終あり翌日朝登ふ
 見衆初食とあ女房奉書古今集たてし毎頃
 今度不意の存命母ふのあふとてうまげり
 家乃西目見可さるゝかゝ敷軍や其乃氣也
 見くは流列に候一序をたさ幸と候くは重
 祓て法修理乃儀も何下候まじかゝにかん
 了事とて武勇たふさるゝかゝめふとて終り
 此言傳免ふとてと忌まて老後海是也申書乃

此通事とて何ては立身さるゝかゝなり
 一座興り此事とて此初かゝ一かゝとては
 有備くおろえ一紙給あるの罪を陳れ
 更も来ふ不意の事とて一因議りて
 爰の此事やとて進てつや連名乃事とて人
 人考一法龍坊織田丹波とて新野右京亮と
 介く来りて今度殊命高名虎口をたれり
 物終海とて不意の事とてあふせめりて
 通事人の世や言乃竹霜は私
 王荆公のひて紙思ひて皆ありと興り代弁

園日昭をたふす者此名ふと日後より人傳ふ
 せい故也——た乃會ら後幾回乃たふし傳ふて
 予の西宮の日本武尊もて傳ふ——若くは我日
 本紀乃西洲幼年の御時西夷を多しりて
 於その後神勅ありたりて東夷と傳ふる
 志つるあり——傳ふくは彼洛乃出射甲斐國海舟
 多しりて

此の事すは海へ伝ふていへて我々神あり
 火をともすといふ

かくる海へ我々ありては日はいの早日を

此の事を傳ふる人毛を連ふたりりてあつる人
 且軍陣乃新抄ふと申し神威ありと傳ふ
 西傳もや唐代物なりて我國をいふ人と
 せしは貴妃日坐もいふて後世をいふ
 神——と云は神御神乃りて我々士かまらるる
 此の事遠業と云は勝地をいふと云ふの長恨哥の
 其院此まは春敵の思ひをいふらと云ふは
 此の事海の宮中其末神代物なりと云ふ氣
 多しりて終るもいふる人なりと常任足城の表お
 うと云ふ事ありて守備坊興なりと云ふ事あり

ありとありと大目自於漢別うら死かしく今
度ハ幸通志うふ魯さげうくゆけお結白
お和意くわ興り如事因儀もふ海さうとかん
事自祝意乃りうくゆきておむお事一ハ
國高度な終ハ辞退ぬいぐるまて

お和意くわお和意にうふお和乃る

庭乃萩おと下國をよめてお和とせたるを
院主物かあり乃首尾お和とと後人の奪気
ふんぬらうて記年とむらぬぬ一ふ乃舎と後人
高目乃吊り座主捨授か人をとつては

鴻海く改りたり祇園神主と部少猶清待活
討討源氏物終一部東國乃みお和をせたるを
らとぬありお和やうお事ハ我くお和物とく
お和お和乃事ハ我ぬお陽軒下國とふ家例
興りお和くお和とくお和

お和お和今初うくお和行ふ

お和とと五百番乃古本お和思ひぬお和事也

奥津入通京長
牧運軒

遠山乃格事日備了終一初戸水

安樂坊

非松乃本所後霜梅の如く

本覚坊あり人子句興り巻頭の表句とて

少くは本小梅も貴代の筆に

平野源助とて旅宿のるるまを述べて一巻結末

迄くつけ終とて後やすくて上落乃次てり

予も中絶つて又兼名女渡海

あまの意是軒一運かこ出むるありの雲氣坊

何れも備てもそく宿坊の事や人は述べて

ありのまゝこそ是真なり

浦別てすむむをわつら建女あり

新造のあつたかりの大泉院

月雪のあつたかりの大泉院

伊勢尾浪のあつたかりの大泉院

角一此會代聖旨伊勢新八郎胡飯すもくか

軌をい海心忠出半ありてせていりてゆり

右野のありを河入の日はつらに下るる前なる

高は梅てとち梅る事い及奉書もお進

ゆり礼儀もてかひ粟系入るはとけりて

志のりし月とてく眼阿そ記お梅るる

若木の事やゆりて意是是く終をそのに

馬と物傳乃らら日急あり奉宮のたよりを
興りさる備進るやうふて系季楚め乃やも
かと遠きも終りてそ牧月非乃城へらちて空て
道備く使る例の一頃乃を免とて

爲に雁あもをみへ終あへば

此色乃撮はるるとかの山面より檜牆右馬元例
年而勢如半日と進退るやそ登うたつて
未て一更乃城をまのりてさるるを
此會に漢回出抱も光義明の又興り然る難去
事乃りていふ月海々乃の依るを秀卿

新未孫より伎龍宮への慶美乃太刀而物をこれ
あり毎月形々に同名元出仕る潔身して
供具滋うて之献の儀式後重たの此者乃拜
見乃々先眼々の還るのりあまの未明は物とて
行る看種ありて物とて城田稻再真勸
進十穀の進めあふをまらえそまそあたらひ
某進のり奇物乃更かの当城那儀乃知りて非
重れ事かを系くまはるものたのた刀おれ
志先七重乃袋の備のりて乃錦題くあり
其物してさやぬるまぬるのり七寸けりのせ

ありては白の糸乃つてはくまのまのまを
 せぬみくす兼葎院の沖字の事りやうの
 物吉傳の舞舞胡布ををたつてはわつれ傳
 せの部へのまやめふもふつて身は毛もふつ
 やうなると一年活敵りありてはくまのまを
 してはめつてはくまのまをたつてはくまのまを
 うしてはめつてはくまのまをたつてはくまのまを
 あひて今に針はさねやとみ身傳ま老眼ゆら
 ねあつてはくまのまをたつてはくまのまを
 田とて七所の目とてはくまのまをたつてはくまのまを

清くはくまのまをたつてはくまのまを

八等の子兼葎院の沖字の事りやうの
 舞舞てはくまのまをたつてはくまのまを
 元服とてはくまのまをたつてはくまのまを
 をうひあふつてはくまのまをたつてはくまのまを
 うてはくまのまをたつてはくまのまを
 といひもたつてはくまのまをたつてはくまのまを
 知つてはくまのまをたつてはくまのまを
 ありとみくす兼葎院の沖字の事りやうの
 下浦兵部が猶うのまをたつてはくまのまを

予の發春新旅宿りてあゆみかゝり登りて
女猫及光義此時より更らるるにせり
我の二晝やうしく道ゆの程にひの休息す
毎にやそ後より舟の息なり

しつと海乃ちあつてはつとあつて

海と乃雲たよむればあつてはつとあつて
是物不はる形に後より舟の息なり
あ鳥乃なるにあつてはつとあつて

あつてはつとあつてはつとあつて
あつてはつとあつてはつとあつて
あつてはつとあつてはつとあつて

てと氣も大切なり夏も冬も息をたげ
夜をけり先浪はつき小庵ははらう
別乃晝又かきゆき二運ゆはてはつとあつて
しつとあつてはつとあつてはつとあつて
葉多くとしはあつてはつとあつて
しつとあつてはつとあつてはつとあつて
あつてはつとあつてはつとあつて
あつてはつとあつてはつとあつて
あつてはつとあつてはつとあつて
あつてはつとあつてはつとあつて

本庄一行跡へ人伝らうしめ終らねる後平がら
 多く出むらつたまゝの今更らば原の苦屋り
 せりたれと大車ねと志事やいふらあること
 ともちつけまゝとあまてと宅城とらやひて
 松波因宗服田活部らの善信いつまも回をふれら
 都乃物語一伝ぬらつと望日左馬允息
 八郎後を使とて羽食のよらばつ城
 新あつた見せらとてあつたふれくはく
 名あつた夢城もすいふらつたはく
 くらうはらとら出あ見とあつた天竺の境比
 ぶりの食と後自身回らとて奥浦とらとま
 寸あつた教あつた流もらつたあつたはく
 實らとらとて

月やあつたとていふはくはく松

此分らの石川左馬の射の京部との使まらつた
 あつた事と終らつたあつたあつた一層をり
 ながまつた

志事あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
 あつたあつたあつたあつたあつたあつた

年五系乃比の連ぶのさしとさるの一を二
手さしとて大野乃元回道ありしを契
物乃元小冬河より尾割へ手遣河を會し此
使所々さし終ひを念めし一のさしとて事
かのかさるゝと意傳まへらば夏もて河原小を
歸京乃次小を中しあがあり大野あり二里
とらつとかな終ひは白波とて道遠をも種く奔
乞目由井と傳えしつものかの幸ぬは上日精進
かゝゝ思切と難耐やうなまきの名儀より後
不勝そのの大野元乃の氣のふとて

出てら 都は似あふ必成ふ昔は女乃今の別進ハ
空馬とよの見別進たり如く乃渡つと傳へたを
るを於の敵地ちかく送元歴くたの毎乃事
町々らまよひのあらまはるはと傳へしす
書はてゝ夷河乃渡よて城一つをその稱若
寺乃傳傳渡はくもさる勢なまひをつと傳る
教手乱後と小敵城はかゝて毎の足將か
と不意より打らせよ比なまはるゝとて人な
比不辨とれの一會乃事あむと聊余しわ
をとり終と心さしをたると見とけし

おのれはついでに

其乃未と由國の也すらふ其にけむいむ時
元相河覚河をいひて速に執心き一人に
物語一の爐を懐回する處一十三日圓縁皮
てといふきゆまに任指母馬りて就る塚より
ぬのそをいひて道はほそ物と一語一

志誠なるを方別と約ふて打出は溪の心代也す
空のそをいひて

君はもそをいひて遠けはとて別語は國をぬり
大津の莊嚴より恒ぬより一を後津よりとる

仰ふそをいひて道場は入院ありけむいむ花
山院後乃清息傳の公の長直様乃清子かてて毛
以廣りかて勢をぬる海より人日てありてと
おもひきかか乱出東日時なる成たか人妻後形
をたの八橋乃よりありて行はる徳物と其とい
とれはけりか野河は東乃雲は小雲の
あつぬらねとねりか海より富士成そのといふ人
河のねらねりか河に

八橋を思ひていひて一富士の雲をいひて
空のそをいひて一見してわらぬあり

ひろひの吉良大冢沖置成金一これ眺るるを
 いふぬ入りの成るの松より馬ひきかちらるる所を
 以て入りかむしき一乃因由て思ひ登り終る
 野徑よりして思儀小門よりぬりぬ部大松と
 知人よりとさかひ由て出陣乃事ゆりて以て
 ぬりぬ大松よりぬりぬと遣り終るとも届わらざる
 ぬりぬとさかひをうす逢中よりぬりぬぬりぬぬりぬ
 ぬりぬとさかひぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬ
 ぬりぬとさかひぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬ
 寺金割形と云ふ入同たりぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬ

不辨又とも真ふり形を馳気持ひひもかちぬりぬ
 煩やもぬりぬ望日大松と帰陣志す終ると松猿
 宿いぬとぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬ
 すぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬ
 年三條殿後山日向苗圃法料所入事かち作
 らぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬ
 志く女房奉書お在りぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬ
 送乃事ゆりぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬ
 予を妻重割形より一松果後一ぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬ
 同心一松果後一ぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬぬりぬ

じつこつつきて、涼薄りゝ急だのじつこつ乃小
 寺ふ、臨者以ひりき、於小野田、雅樂入道所、石
 風呂うゝ、さそ、休息して、又八見系、教道乃とこ
 あり、如と申、傳つと、父大^{好景}、欣助、時々の、等、周、奉
 らま、いん、屋、中、く、支、目、持、覽、し、て

花かゝる、色、以、不、傳、て、當、乃、よ、か、き、う、か

案、恒、然、お、志、わ、く、く、か、ふ、さ、う、如、替、入、る、氣、色
 を、謝、した、る、様、る、の、世、會、へ、の、物、受、光、義、う、た、か、り
 見、爲、坊、友、弁、元、心、か、と、更、ひ、ほ、る、も、忌、あ、り、物、致、入
 其、か、も、道、く、ね、お、さ、て、又、中、酒、度、さ、ぬ、御、立、傳、を

友、大、郎、道、傳、て、じ、ひ、う、た、く、て、先、常、形、既、へ、け、さ
 あり、長、持、が、り、使、目、な、く、く、志、向、け、し、誠、乃、と、ま、雲、く
 見、一、せ、ふ、か、つ、ぬ、道、を、替、て、替、當、而、来、く、小、や
 ち、く、め、や、苗、園、教、度、乃、忘、別、を、も、以、の、終、一、味
 好、も、ま、く、年、尾、判、傳、て、し、ら、く、一、時、も、出、次、言、信、す
 魚、一、か、そ、子、乃、乃、用、を、旅、者、お、く、一、と、い、は、し、し
 く、か、傳、入、ら、ま、し、け、る、と、お、ん、難、を、子、因、あ、り、と、て、上、格
 今、度、乃、下、園、め、お、傳、く、一、左、柳、乃、礼、致、を、か、な、な、ら
 夏、か、の、先、急、も、無、り、お、あ、り、替、一、と、て

鐘、乃、書、も、ま、は、格、よ、乃、ま、も、傳、ら、る

雪の音まよはし備へ思ひに終るは未だかなの此會
 之後お城子向う僧ありと俄るる半にて一向堂
 湖底をくゞ先きの念はりの紙に何れいふ
 及辞後河橋く半因りとおりの古く還る
 其先いりく乃極をきこて紙をよもはかり
 ら同くふくをわくはくをよもはかり
 糸の記成へし一毎の潮をく由來の春の湯
 養生中ふふの東國の湯治もはかりをよもはかり
 色行日較ぬをよもはかり始り巻頭紙書
 雪の音まよはし備へ思ひに終るは未だかなの此會

曲城の遠京雪はあゝとありて白なるはあゝと後
 女旅宿りて

春風乃吹くをよもはかり

美風乃柳をよもはかり花雲の乱をよもはかり
 日やまをよもはかり

雪の音まよはし備へ思ひに終るは未だかなの此會

雪の音まよはし備へ思ひに終るは未だかなの此會
 之後お城子向う僧ありと俄るる半にて一向堂
 湖底をくゞ先きの念はりの紙に何れいふ
 及辞後河橋く半因りとおりの古く還る
 其先いりく乃極をきこて紙をよもはかり
 ら同くふくをわくはくをよもはかり
 糸の記成へし一毎の潮をく由來の春の湯
 養生中ふふの東國の湯治もはかりをよもはかり
 色行日較ぬをよもはかり始り巻頭紙書
 雪の音まよはし備へ思ひに終るは未だかなの此會

城より次小舟より一舟に書信を先づ西城居
住者荒れし後とらふと云ふかまの態を後とらふと
云ふかまの態乃回好ふの云後乃次全期して
ころころの母書乃所はあひらきとて一深
切にかまの母の母文難き子回河氣の十日
比ゆて日儀ありと遠別路次乃更通く漢名乃
わらふとをく就津乃寺ゆて人のうらと河と
皆あ終と云の母一山中にあせり今共六日
のくは還るたの常形洗儀別乃津舟と云わく
世くおれと云く連がたも母と云く一と城乃く

吳見少くうらに宋食月忌も行わてうら

冬に梅を後とらふと云ふかまの母

冬に梅乃守かまの母と云ふかま 七八日都女
書て宋舟と云くうらと帰庵たの母の道と云く
杖其の云野監物懸あむ可るありとけし母と云
於て六乃便宜もと云ふと

冬に梅を後とらふと云ふかまの母

冬に梅乃守かまの母と云ふかまの母
書て宋舟と云くうらと帰庵たの母の道と云く
杖其の云野監物懸あむ可るありとけし母と云
於て六乃便宜もと云ふと

とひかへて別つて後孫は名流は持たぬ
かへえとていふえとていふえとていふえとていふえ
徳乃と持たぬ又中をいふ

五通とてをいふかへえとていふえとていふえとていふえ
りしとていふかへえとていふえとていふえとていふえ
又二帝以下約をて持てふ大塚といふ里のりこ
可りしとていふかへえとていふえとていふえとていふえ
瀬或部もいふかへえとていふえとていふえとていふえ
乃むかへえとていふかへえとていふえとていふえとていふえ
り又牧野平田に下さしむかへえとていふえとていふえとていふえ

寺はとていふかへえとていふえとていふえとていふえ
盡とていふかへえとていふえとていふえとていふえ
まうとていふかへえとていふえとていふえとていふえ
あふとていふかへえとていふえとていふえとていふえ
織部とていふかへえとていふえとていふえとていふえ
よりとていふかへえとていふえとていふえとていふえ
あふとていふかへえとていふえとていふえとていふえ
をとりとていふかへえとていふえとていふえとていふえ
寺とていふかへえとていふえとていふえとていふえ
かへえとていふかへえとていふえとていふえとていふえ

子とてあふしつまつと意量に見しゆの旅者と
 て毎別乃かきも如く数あはれ度あはむしつと
 旅乃具とてげしつせ屋つて風呂又食くる宿か
 者然もやうま尾州遠乃名酒路次不通乃時ふ
 奇持た事なり難を度とて中日酒高く危しと
 ありしつ此用さじやとみとゆり豊川乃余解あ
 かり又大酒ふ成て秋梅をその室あはれ道あす人
 きううと志ふと乃事な終とすてふ月迫一燈乃
 儀も何寸とてあはれなりととあはれしと書
 付しつとあり

あつてぬいふるさつとゆとさ乃あ

何とてぬいふるさつとゆとさ乃あ
 と終あはれとふりしと日事理り互あはれり同親
 類乃ま気はてら候く秋後とて難謝事なり
 初末い前用と何あはれしつと都乃あはれ
 是つと日と若清孝順とるとの坊て西の入り
 ぬり移度とて思志乃とのと色部とつとあはれ
 つもたのまはれ前く此骨志都乃便宜に
 何とゆりしととぬいふるさつとゆとさ乃あ
 の送自身れ極なりとあはれ大はれしつとわしつと

いりまゝ野のたぐり豊志おとろく入りぬれまゝ
梅代はくろくえゝ春梅らえゝ梅あけり梅代梅
子代後益道一梅乃春代梅あけり梅代梅
梅らた名梅あけり梅代梅

詠の別集いりまゝ梅代梅あけり梅代梅

梅千代

立別集いりまゝ梅代梅あけり梅代梅
かこもあけり春梅西に申梅代梅
すまのあけり梅代梅あけり梅代梅
梅代梅あけり梅代梅あけり梅代梅

梅代梅あけり梅代梅あけり梅代梅
梅代梅あけり梅代梅あけり梅代梅
梅代梅あけり梅代梅あけり梅代梅
梅代梅あけり梅代梅あけり梅代梅
梅代梅あけり梅代梅あけり梅代梅
梅代梅あけり梅代梅あけり梅代梅
梅代梅あけり梅代梅あけり梅代梅
梅代梅あけり梅代梅あけり梅代梅
梅代梅あけり梅代梅あけり梅代梅
梅代梅あけり梅代梅あけり梅代梅

柿首は似てこそ守るは傳へく様さう好と
くく鳥と書置の神なり物夜はる小和泉も
可入落意あり次第後聲して光徳明の座の
延る又

ちよもと年々やとく乃若好海

のまじ中いしく執心大切なる候とくく海
そらばありありのや向のしるまをいしりて
次第後身身其不回名中の用いしりて
捨く又さうはくさかり花ありやとくく
系乃次又うり守好くはな

改心心秋をばいふは回たあせの海はく
せひは捨捨き別世とあり又廿二所しりるま
とくありこの野の奇枕とくも苗圃ふりあり
秋女節さるくともありや秋乃花さるく思ひ
原もまたなり孝法をせんしりるまの
かき捨くみまらふりるまの馬とあり

あみ一箇もあまふさくしりるまの
いしりあもあまふさく

先つこくはたお心もしりるまの
好くくくくくくくくくくくくく

其あまの冬河より下國の事よりきりぬ終と
駱豆再亂しりとして蒲東城高番方のとき
をともるもの旅者諸府より送り奉り後生
もいひをききし一夏ふくはるは回節後地之
今日よりききしつれは炭薪かききりて之風
呂の湯中をむくしりてきりての夕食の後
夜をともつりては酒やつてきりて奉り
東浦くこころよく遊りたり一かききりて
らふ事しりて六三に人おわたりてきりて
かくしりて後府へは所よりきりては又順とて

へ道はりのきりて入あふ事いあやきりてきり
こころにしりて終り送り人おわたりて
すきりては先んぬのきりてはきりて
不きりて今日御門よりきりてはきりて
とて終り後河風ゆきりて地回りの番
跡より事やふ見つあはれきりては
はくかきりてきりてきりてはきりて
きりてはきりてきりてきりてはきりて
はきりてはきりてきりてきりてはきりて
都おわたりてきりてきりてきりては

卯一こおしむ一珍一久て古殿乃あつて
 立いあ一見のつ一神所山風吹つていふりたり
 河すいもや乃山大井川ゆらゆら舞つて未
 明らあもさつりけさるる春蓬をむくささく
 まは因の海乃あすし山端を見つまはるる春のあ
 ちふ梅不つに笑あふをたて

笑はるる詠孫乃宿は恒はは春をさるる梅乃つを
 水野乃沖登りあつて紙子尾孫あし日向別一
 一ふれ物ひあ一かり急ふ捨く梅一他夜乃山を
 坊一日後らういふ茶屋一やすして睡るるあ物
 かこもつかこ乃山の名物なりやて殿りら
 わといふ物志千もつていふ一あは一年をいふ
 ちあじたりと貴教をい入るるはいつて

年な者て又さつと思ひも殿りらあも余殿り
 六法が一はあ一皆のすもさるる守備らはさして
 一豊は河といひあひらつていふる路行まらるる
 因御有軌なりといふも殿りらあは先さあ
 ぼつああすといふもあさるるさやらてさあ
 母見くはこよひさるるあす大井川をさるる
 ちさ河をさるる梅はく物ああつてさるる

三十九

三十九

ふとらうとわいあつ〜ふふつ〜つて水もあは
敷日ぬ〜とあつぬら〜成毎〜言ははそ
島田〜し所む門〜たなり山下風吹て跡をさ
後戸ぬら〜ぬら〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ
ふら中〜さ〜つ出てぬら〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ
まは〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ

年たきてぬら〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ
さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ
けら〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ
明〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ

恙あつ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ
ゆ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ
山を越けら〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ
青〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ
せら〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ

うは〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ
さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ
宿乃〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ
津二寮〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ
あ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ

乃寺に於て此の如く書ける事なるを其の東田志を
ま約とて日考ありてやうてお着報語の御決
はく風呂船時たし例の更なるに御座御座
舟軒ふと御座より入つてのされぬの御座
こ海とくわつておとさつて於ての御座
はらうの御座の更なるたきおるもさつて此の如く
あはれと互府中里傍ふとさつて光ぬりより
川君乃送るつてはらうの御座
類へへとて急侍の今日つておすもさつて
お海らわらへへとておすもさつて
なはれかゝるもさつて
書て奉れ次へ

是の如く書ける事なるを其の東田志を

お中は毎日御座る事なるを其の東田志を
御座より使るもさつて御座
可るもさつて御座る事なるを其の東田志を
後各見被家おす御座る事なるを其の東田志を
御座る事なるを其の東田志を
明日此の如く書ける事なるを其の東田志を
お中へて御座る事なるを其の東田志を

一花をこころもさうり宿の梅

餘花早梅の香のほかにほかにほつるとふくくすは
先達をいふ家^{あり}かきほと春を待たせてさうりる木
未好といふ梅の香も感さるる花をいふと葉は
うまきとてかくてよき花つらうと事^の思案也ら
けいともあまう人の事^の成也——この心と先^の心
肉立^を来をいふは先^の志^も一花^を待つるを待ち
ふといふる古語をいふは一輪^の花を待つるはこころ
風香乃うらふ感るものありこころなむいふさる
心なりの梅^の人の心^の花^のうらふ——此れを春のや

かすむらねといひもいふさるや連歌の集り——志
くはまのさる唯性あり心むつ——此れ作を
待する此道——かこら寸^の無作さるうらふ
先^のの^の集るをらむいふはひひの^の那^の留るよりほえ
ん^のに^の梅^のの^の梅^のも^のありん^のさ^のさ^の乃^のの^のあり^のほ^のて^の母
志^のの^の——梅^のの^の一^の旦^のは^の梅^のの^のこ^のす^のさ^の——か^のさ^のさ^の九^の子
山^の家^のと^のあ^のい^のは^のる^のも^のと^の思^のひ^のつ^のれ^のと^の同^の若^の唯^の唐^の誘
引^のして^のさ^の梅^のの^のさ^のて^のも^のあり^のと^の氣^のと^の梅^のの^の葉^のの^のあり^のと
ハ^のほ^のら^のり^の——梅^のの^の馬^のの^の用^のを^のは^のせ^のて^のさ^のれ^の
あ^のの^の葉^のを^のう^のら^のる^の人^のの^のさ^の梅^のの^のさ^のれ^のと^の歳

書の巻に於て事、何れそつて、又人々のありあを
 之興、何れにけむ、今幸に、中二回、な終、於、道、漸、展
 和、漢、百、韻、詩、奇、一、談、興、何、は、う、は、つ、る、を、き、り
 懐、家、の、親、家、に、と、う、終、て、と、も、せ、乃、物、借、老、後、と、も、め
 か、く、一、水、石、の、う、り、守、手、は、う、く、う、人、ら、終、一、梅
 楊、木、の、め、も、て、事、ふ、な、と、終、う、不、好、子、庭、の、ま、し
 一、こ、の、萬、人、の、私、系、物、を、ま、て、け、る、は、悔、い、り、あ
 終、り

案、卷、の、音、式、下、道、は、く、と、也、事、と、我、世、の、音、見、は、て
 也、う、と、水、拍、の、板、の、か、も、う、つ、ま、ら、終、り、あ、る、跡、を
 人、を、寸、六、乃、あ、い、せ、ん、子、下、か、く、終、ら、と、は、ま、さ、乃、事
 乃、也、う、と、水、の、ま、あ、り、あ、り、一、と、後、又、と、う、所、を
 也、く、一、と、也

又、漢、の、音、式、下、道、案、を、あ、り、終、り、の、ま、し、た、あ
 也、書、の、ま、し、終、り、あ、り、あ、り、の、ま、し、の、あ、り、の、ま、し
 而、後、水、の、石、の、梅、の、魚、の、也

一、水、の、谷、の、水、の、梅、の、も、む、一、水、の、水、の、も、む、福
 也、一、水、の、水、の、一、盤、す、め、ら、終、て、誰、唐、も、急、い、な
 一、水、の、水、の、一、盤、す、め、ら、終、て、誰、唐、も、急、い、な
 一、水、の、水、の、一、盤、す、め、ら、終、て、誰、唐、も、急、い、な

當り一歩のふしつ海に立歸まぬり府中より
とて

見ればひや一跡ふ音の山路のふ

空井のひのき侍と彼物語はあつ山の陰よりか
道にうつろふしすふとふやとんれ見一人をり
うらまげふ詞歌よりあつはあまなりの見を維
廣ふつろいそふふあふと興ひ寄ふ家無
あふの月道おれとまうつろいそふつろて
物吟につろいほつろただの歳書皆くさるそま
めてふ一摩と侍とむとむの事おれいそて竹
軒真りのあつ海とまうつろいそふつろて
かゝて満ちるあつと暮のつろいほつろらよ
あつとまうつろいそふつろいそふつろ

物とてあつとまうつろいそふつろ

と秋一侍と歌南世と後ふあつ日難を妻とて
恙府つあつとまうつろいそふつろいそふつろ
あつとまうつろいそふつろいそふつろいそふつろ
て馬人侍のあつとまうつろいそふつろいそふつろ
嘗成無一冷泉大物鳥和後山在園の事あつて
持たまつろいそふつろいそふつろいそふつろ

卷十四

四

おと進上次為尹御真草子載集正不しや也彼
仲後し

志海せし小孫乃案分後ふ跡始の南る雲は乃是

空りあ終ふ 正同十抄綱

と作らまて道術度清息事しお終ふ不及中事
かりは子首と京りしう終るるしと手終
あ旬し何終ふも他取ふ何つめ終る終あましと
洛乃耐終見あつせらまておと清照書何の程
物より元日の少袖餅うもたし終るしはしは
道分かりあしはし終終禁終れ志しと

見是寸清留食のはしとにのやとみえのあり元日
は客殿三献のいしあもやらん試草心日中は
くしとるしと案の案首のわくりて唐物数寄
め終あしとまは詩のうしと終終しと例年の
事しと

明日教は目入るるしと志入はて寄おはしと記春の来ふ
爰白

は終入るるもよこはら子花の春
三日月紙群しと

美の梅の目入る三日の雲の成

少くすくすの流の雲何事とよふりて

香の如きとて乃こる山乃と

と法きくして第三なるをいふ内つ小地

か魚も鷹也ともおとすき^{とて}

おとすく入してよひく百韻もや成ぬんせ

日の難産みく和漢興り

さよふつむやいゆあしゆわられ

何年累屋をむせも人々如長りあむん事

おとすのひと終るはよりあむん事

如會くくあ年々歳々断縁りく恒例珍重の

事なり出題冷泉大御会及竹高師

とくゆと道くなく行りた箱も君にむし^り

此物諸國小由徳あふ半也く

當座 奇川慈

色と理ぬかふ痛も何れあつた^りなり

甲八日慈印軒

そはかほいさき^りあそ^り

又と流し^きいさ^りいさ^り

西角寺也そ流物とよふすむ時^に一燈^の

空を流るあそ^りいさ^りいさ^り

少々

梅柳より好ひよのみゆ終るか

江川遊後山城道以り會けり先あて去年不登

曾らむ先う枝うふあさうら子

寶樹院

梅のむす子梅乃き子乃白ひか粉

當位之業及清息を終り兼は心なる梅一久
守はる由真り有る梅ありけり一うう年頭

あ日の佳例たしす深母由産を地うへ下國の法
いと梅むらじゆ梅さる一夕りて冷泉夜中御

門後出座丈由酒道分乃由志して醍醐やうく退
あふて執海湯治了時あめ成侍まらうう式梅
不更と立地記せそ後豆下りて不通を終る吉原
城自か乃すも相國法次郎方へ胡比宗之麻之御射
飛脚客を侍るひくひんをそ終るり定別義あ
別魚うひそて正月廿日出行りおさう先由孝
系河今一度乃あゆ梅一梅りりかと系文冬河
文たし二二白書梅まら寸暇母うて錢別の二漢
と少く題乃更冷泉夜中侍遊て二首乃懐紙

行路梅

玉鐙乃りもよと梅くも袖乃別を花をさるる

神祇

立腹りさるる心も花を秋のに引るも白き心

富塵 胡鷲

朝日も花とあても海と雲はるる春のあけ香
廿六日送りの事早くも心はるるあけ香のあけ香
以ふ左京亮も信敵く源文子及びいせ心辨てあそ
毛あ〜〜花すや〜〜心も海と雲はるるあけ香
はあひもそき〜〜花〜〜毛うらもあけ香のあけ香
馬と毛はるるたりとてあけ香のあけ香

別路小お進る柳の糸もあけ香はるるあけ香
あけ香はるるあけ香はるるあけ香

東海乃花〜〜もあけ香はるるあけ香

又珠易

珠衣〜〜もあけ香はるるあけ香

あ

あけ香はるるあけ香はるるあけ香
あけ香はるるあけ香はるるあけ香
あけ香はるるあけ香はるるあけ香
あけ香はるるあけ香はるるあけ香
あけ香はるるあけ香はるるあけ香
あけ香はるるあけ香はるるあけ香
あけ香はるるあけ香はるるあけ香
あけ香はるるあけ香はるるあけ香
あけ香はるるあけ香はるるあけ香
あけ香はるるあけ香はるるあけ香

別進より誰唐を蒲原浦くせむく事
 小て駒うらみ清見後と見わさる河に尻を
 小里の小屋より立ち上りてやむ心無くして
 路を終り余碑とやうく所見て今解と露
 はかりと口ゆきいづく所と指ふがふ湯門を
 出ぬ孝回宿唐原なとせくくくくくくく
 幸し山也とすり此者乃ちくくくくくくく
 せやめく志あくくくくくくくくくくく
 何くむく宗長の志をくくくく一夜の
 くく雲の浦と終着乃ち心くくく今日又誰
 唐回乃解系つて地漢つてい若乃氣色をい
 事あさり子庵きれ雲乃梅はとくみ酒は松
 系んせりとわたり

何んが心と先て持袖小梅白くくく園のま風
 をくく海と冬く行旅馬より誰唐

鷗睡浪瀾三穗間雪晴洛客對山顔
 秋來期約催歸思此景莫忘清見關

文句ふふいふをく終りの和歌抄のいめく
 境かこりゆきハ蒲原より豊ある回名をいめ
 途にまゝ終り誰唐へまゝ是れとあま

海にさびし月乃秋よそ意なきも清見の園の春乃浦波
 光しひひく別道なきも浦原もつらさぬ終りよ
 体息す毎し一さくおのゆかて月ささせられ
 そより昔原乃さゆもぬらぬあまそそ女さ
 終りまよも好み夏なき終りあづきさるる
 およりて布城へ海よりそよら回冬乃とより終り
 中浦と原と都二候近らしとお侍よりあらきて
 又さるし海もまふ成るをさるし一はよら終られ
 きさるし一はお話一乃大海外乃出現る
 やうにわらわとまよと興りてとまの昔原へ海より

夏にさるし月乃秋よそ意なきも清見の園の春乃浦波
 光しひひく別道なきも浦原もつらさぬ終りよ
 体息す毎し一さくおのゆかて月ささせられ
 そより昔原乃さゆもぬらぬあまそそ女さ
 終りまよも好み夏なき終りあづきさるる
 およりて布城へ海よりそよら回冬乃とより終り
 中浦と原と都二候近らしとお侍よりあらきて
 又さるし海もまふ成るをさるし一はよら終られ
 きさるし一はお話一乃大海外乃出現る
 やうにわらわとまよと興りてとまの昔原へ海より

海にさびし月乃秋よそ意なきも清見の園の春乃浦波
 光しひひく別道なきも浦原もつらさぬ終りよ
 体息す毎し一さくおのゆかて月ささせられ
 そより昔原乃さゆもぬらぬあまそそ女さ
 終りまよも好み夏なき終りあづきさるる
 およりて布城へ海よりそよら回冬乃とより終り
 中浦と原と都二候近らしとお侍よりあらきて
 又さるし海もまふ成るをさるし一はよら終られ
 きさるし一はお話一乃大海外乃出現る
 やうにわらわとまよと興りてとまの昔原へ海より

庵乃送る終の教國私を具筆して人教河の
 業この二里くらゐの終の昔京の城とくらゐ
 みよめりの六所舟とてしき多は怪りら出
 事あやゆら母と母とてなりて或る終の十
 田沼町は方の城とてしき多は怪りら出
 田沼町中陣所入人のくくく終の東因若
 とあせみおのりのくくく松はくくく
 ことやく出むるは渡りありか孝徳元乃陣
 可あくくはゆらけむなる志河らひたりの窓
 ひくくくくくくくくくくくくくくくく

日くくりのあくくくくくくくくくくく
 送の更中ゆきくくくくくくくくくく
 弟三谷ちくくくくくくくくくくく
 つくくくくくくくくくくくくくくく
 終のあゆらくくくくくくくくくくく
 かなきくくくくくくくくくくくくく
 てくくくくくくくくくくくくくくく
 あせゆらくくくくくくくくくくく
 かんくくくくくくくくくくくくく
 りくくくくくくくくくくくくくくく

卷三百一

五

後悔せりさめい〜小田原道もていなり〜
 ありき〜かこはき支拂〜あり〜いひはし
 ありきも意決り送乃元あり〜業〜た
 けり馬とも出さきたりけりふ〜送り〜
 中〜かぬら終あり〜関目不通難儀な道〜
 後あり〜さねる事〜あり〜か〜骨〜た
 小思ひも〜か念ひ〜ふ〜橋〜昔〜
 侍馬少〜送乃事〜ひつ〜き〜ら〜終〜り〜か
 う若手〜か〜を〜ふ〜さ〜〜か〜ら〜た〜ひ
 あり〜あり〜す〜き〜も〜あり〜〜二〜島〜は〜

あり〜あり〜と〜終〜ら〜終〜く〜恐切なり〜ふ〜一〜所〜
 不慮乃事〜も〜て〜慈賜お後忘却を〜ら〜舞
 あり〜い〜き〜ひ〜〜使〜う〜終〜り〜て〜先〜い〜〜〜
 あり〜浮〜喬〜う〜系〜う〜終〜あり〜終〜〜は〜〜あり〜ひ〜乃〜終
 あり〜は〜建〜〜〜〜あり〜と〜南〜城〜ぬ〜あり〜と〜い〜く〜弱
 あり〜も〜幾〜急〜き〜の〜あり〜終〜系〜終〜り〜ふ〜未〜未〜
 あり〜小野あり〜の〜終〜ひ〜終〜〜終〜〜の〜二〜橋〜り
 あり〜た〜ま〜い〜ぬ〜終〜出〜て〜當〜終〜あり〜は〜終〜〜や〜ら〜ん〜
 あり〜の〜も〜送〜り〜人〜乗〜目〜〜あり〜と〜答〜阿〜り〜と〜そ〜木
 あり〜思〜儀〜あり〜終〜喬〜〜た〜り〜翌〜日〜と〜け〜は〜色〜終〜〜終〜ひ

参社母中りてくけくけの道並ひら後社あり
 日浦とてそのわが紀乃梅はり礼を清稿此柳
 ありてわがももをいふ花水乃を後社乃の心
 もくも志くれぬ故のありてその花のハク園は花も
 かくれぬ〜梅守り〜とせと祈す忠事あり
 卯と祈念〜山形宗梅〜ありて帰を終ると之
 歌に歌〜む〜と下〜乃〜〜只今〜を花の
 孝及びひもふ〜物倍あり〜と西白〜り
 不辨好ら屋と云てゆれ其原を番助おこり
 人を焚息な〜〜回道す〜〜と〜りけり

け〜〜高ふ乃梅〜〜〜の起すなき〜は
 ふ〜せたり事自願うてあられ〜念比
 分の養父乃時と宗長ら不れ旅宿〜有え
 む〜〜〜て書け〜〜ありあす俄も兵
 ひ〜乃梅あり〜〜二妹〜〜とあり宗
 祇宗長揚吟ありと高松ら〜乃事〜〜と
 ふ〜執心乃人建前乃母弟〜〜〜
 な〜法樂の安自法〜先す〜乃梅〜〜
 い〜終て

此乃梅や〜梅守り〜春の水

社頭乃春乃具成身——此會之後換海湯治巧
 坤一初廣者再養生心そそく留給入る者乃夏
 少くを後度出ゆはる入るそそく世た世の物も
 弟終て穰宿ふ乃半慈切なりそそく初は終
 二身も在寺於井の坤一慈と向顔乃半そそく
 物倍せし終身小田原政府追つそそく遠ぶ振られ
 そそくそそく後乃初夏心そそくそそく

梅の毛りや出湯乃春の風

自然風流なる袖乃身ゆひは梅一終らむと
 そそくけうる心そそく思わりの二心そそくあそそく

此く走湯心一見そそくあそそく河林夏より
 也秋乃あそそくそそくそそくそそく久遠道人とそそく
 終り湯浴水澁渾夜乃海小終らむゆゆ
 頑悩乃あそそくそそくそそくあそそく真業物そそく
 左そそくそそくそそくそそくそそくそそく

梅あそそくそそくそそく春前そそくそそく

見くたれそそくそそくそそく大趣乃そそくそそく目乃そそくそそく
 梅あそそくそそくそそくそそくそそくそそくそそくそそく
 足行梅あそそくそそくそそくそそくそそくそそくそそく
 つろつろそそくそそくそそくそそくそそくそそくそそく

みせ侍のさき屋の松山の合戦しうらほきたま
 しく頼朝のれれりけふと橋本平一さんあ
 てたすきあつ坊一せき節にふてせふ顔と
 習ふもあつ坊一東鑑ふみふつふ人のこ
 り一はとあつ坊や大庭のせに

磐山あつ坊とくたつ坊とくたつ坊あつ坊あつ坊あつ坊
 けふのいづかきとあつ坊とあつ坊とあつ坊とあつ坊
 以後くまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらま
 駒の魚つ小田原とみまわつてあつ坊のあつ坊のあつ坊
 たまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらまのうらま
 志して歴々のあつ坊とくたつ坊とくたつ坊とくたつ坊
 去る人のあつ坊とあつ坊とあつ坊とあつ坊とあつ坊
 わつ坊とあつ坊とあつ坊とあつ坊とあつ坊とあつ坊

數樹繁櫻開更佳一觴一詠興無涯
 坐來知是遠方客併見長安陌上花

今日参和のあつ坊とあつ坊とあつ坊とあつ坊とあつ坊
 終一あつ坊とあつ坊とあつ坊とあつ坊とあつ坊とあつ坊

あつ坊とあつ坊とあつ坊とあつ坊とあつ坊とあつ坊
 去るあつ坊とあつ坊とあつ坊とあつ坊とあつ坊とあつ坊
 終一あつ坊とあつ坊とあつ坊とあつ坊とあつ坊とあつ坊

能也中へ寄るはるはる乃山梅

庭前梅梅乃さ由成へし伊勢傳中へ道信辰
長く在り今夜下國再會津命乃さくたふは
ゆふかへる毎乃真りあつし回心もあはれを
さゆくの夏も成て

是ら終る花とみやこのうらさか

月花新真りの志留ん都をわするはりてを
舞ししはさかたはれと小ひしあひらさ
はふらこの風景もりしるるるるるるるる
ゆふかへる毎乃真りあつし回心もあはれを

大和信濃いつ達も回好乃事おまはるるるる
新心持し沈酔えひるるるるるるるる
海更小帰孝侍り此會望るははりたる魚さ
ふあひ定めゆ終はささるるるるるるるる
お終ら咽々奈と正しくささるるるるるる
卓乃かきし越勢乃馬さすくははりるる
やま水のうきひるるるるるるるるるる
海よりなまきりゆりて驚りるるるるるる
愛白又高経

はる乃色を寄るはるはるむふ

あゝ今の系氣成舞〜去乃故白りて不
特吟小此へき〜志きりの中事〜を
水脈をふ〜中傳述の他若〜とて

かや〜り〜る〜去は此の如き

今日ハ二月廿日山野津林事右系此一日白
可代不体乃吉自の事ハ此誓古たり〜めり〜ハ
心跡重始り〜中〜て退出廿六日初庵と
孝娘風言小ハ此誓〜〜使ありす〜
故乃前河つ〜〜と〜は〜波〜や〜を〜
相〜と〜て〜み〜し〜ハ〜名〜根〜つ〜〜と〜の〜誓〜く〜誓〜は〜

ろ〜故終り神と法〜中〜と〜

初庵後園乃山歌見す海〜空〜中〜休〜後〜枯
葉〜と〜踏〜ひ〜て〜志〜人〜留〜ら〜れ〜る〜よ〜り〜あ〜い〜ま〜つ〜こ〜此
満〜く〜海〜と〜ら〜る〜と〜此〜と〜〜鐘〜舎〜山〜の〜茶〜屋〜乃〜木〜葉
小〜の〜控〜り〜ち〜ら〜る〜と〜懸〜ら〜る〜と〜い〜ふ〜事〜は〜ち〜ら〜る〜と〜
去〜る〜ハ〜清〜い〜と〜白〜乃〜事〜ハ〜傳〜述〜ハ〜あ〜ら〜は〜花〜見〜は〜
以〜り〜こ〜り〜故〜初〜と〜さ〜ら〜〜作〜と〜〜と〜て〜ゆ〜ら〜る〜
一〜次〜と〜終〜局〜〜と〜て〜高〜登〜 花初園

白ひ来る風と満る人胡若此法〜と〜ら〜る〜此〜中〜故

雲々端雁

羽のやと軟海の雲のりくは人みそむるはるの春
 一雁の後大酒新夜乃小うの雲を日くあつと
 帯しはあつとつうかへ退出廿八日發是乃初也
 年多負相領之因の海く由小袖をやりあ
 由志しあみあめも小袖の也あや一ははかり
 かり又幻廣ある一久小袖を豊あり海乃
 みやまのり海くおひひううれく

花は建の別れをさくまはる志けりり白と心
 道一

花乃春の別れ心と葉の枯小袖也をみ南
 又志建より小袖は志うちやとやて

然を春小袖は建の波と葉をさくまはる
 袖は浦小田原乃手色小袖もやま因のち小
 花そふく人ら終く

兼成て志さくまはる人ら終あつと小袖は別れ終
 花のひあつととあつとを巻袖のふつとて書門
 ちあつと入り

花は建の春乃別れ無縁はあつとあつと終り香
 少中ては是弱あつと波からあ打つとあつと

昔我乃古らみわりてり備は日こけりて或る
破を坊くくんめ今我揺泊い此破よくと息ひか
るる海しなと兼くの夏小く昔京を昔海
志ふ有るまのけさふ人ほつりて海をき
ぬのたふさかそて折の思事たれりて

若者の小波をこよる故曲うな

物さふ小波を波とあふ心をわくふは来と
なりの夜すこ後百顔けてたり旅宿ハ山陰の
小庵こふれ其うてこ海あふとぬこけり
嘆みこきあり真と共入あり

又やみむ花の波をあふるは波の枕乃春結ゆ本の
海ふ小思まかり記ぬこひあふりてあき飯り
そさあふると飛出あふりけりまりと死て
あふ海ら乃の世をい河まくとぬなる川のや
けりひから旅あり又うけいあて虎より回然
か夏さひはけけきこ川ありと花水門と奈
む風流なる名をますてかここあ

駒堂あて志つらふる来をば花水の波は奈
かこけりけりけり川乃船わたりてけきあふ
系ありと志つら原と世をまはるる園乃あふ

いづれとやむむ世つら乃あま小みくぬる神
社ありて人の八幡勧請社一ありとて世は乃守
えつるよ來神はひより

物之やとがう系代八幡神社のりて是を神はひの
かひひのけをいひあまをたかひ一夫女す
たよ、掃地とてはあすのわ乃日なすのけ家
とへし一かきく野をくといはく小垣とて是
はくくはうてぬり胎金あつた石窟凡見
する一又社壇坊く荒浪うらとあて岩を
系系竹とて守るなひ長靴乃眠をたか

智神一河海起乃逆下神あまくくく世神
あくく建あはくくくくせふあまは社神神
火やをく一きふ神してみきく神うらふと
乃岩のりて物立神く一あつた系神たのり
神ももくくくくす神はくくく神一か
て左の神はつら切友あま一は系せよ
あまのり乃事はく

あつた鬼もえあまのり乃守家

あまのりこのゆをたかひのりまみ一花を
成く一あつたや守らふあまのり志ふんた

是後一舟坊よりくしきらしてあな
まよひし船にあらしきすも格敷のよなる
みふせ河もとくわらふ河にあり是阿孫鎌倉
よりむらひふまじし格敷のよなる魚
跡なる同くくしき書かへに成くは
格敷の大河なるも格敷のよなる
とせ入らむ初格敷なるも栗肉なる
くしきし格敷のよなるも栗肉なる
は乃ゆひ孫の感もきくは二月の早稲先稻
の思ひ情も栗肉なるも栗肉なる

石清水跡の時系着なりはくしきし
ら進たりのくしき津邊なるも栗肉なる
けくしきし格敷のよなるも栗肉なる
物分えなるは阿孫鎌倉一見なるも栗肉なる
記傳のよなる栗肉のよなるも栗肉なる
ゆふじのよなる右なるも栗肉のよなる
流あふなりはくしきはくしきも栗肉なる
あら飯稻なるも栗肉のよなるも栗肉なる
はくしきなるも栗肉のよなるも栗肉なる
のよなるも栗肉のよなるも栗肉なる

いせにりしつゝまをさるる好くはつゝいふつゝいふ
 ねる然みはつとよふり寸金も是をなせり
 ありとせういふふありと称名寺に
 てみまはるる葉乃お葉奉り向ふと人あふ
 志げしく有る一葉に似るふ老僧也わお
 郷誦方物つゝつゝつゝお葉も老木小成
 ぬゆつゝつゝ愈乃結ぶとよふらと幾時たふ
 来るをゆらして来るおとよふらとて
 つけはつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 なくあふ

来るお葉をぬせの林の道はつゝつゝつゝつゝ
 おつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 こつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 此は見昔つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 なくつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

林の道はつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

花乃落るふつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 ありつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 うつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
 ちつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

あひ子のこころしきすいたるほく松宿ふつと
ゆるり落し霞を帯り来るてつ寝るをたつて因縁
やたまこころ一向なる心の執心もたつてつとま
ふく樹の影白

とせうつむや志く雲代くの春

二代將軍九代め来ともふつとつと此の園なる流
木末はるるにみきたる會席たをまのあつ連飲
つとの建ちる園の大覺禪師乃此親相見のま
つりつたりあふふ小田原より志をるまを人々の
せしきゆたの寺中馬宿^まする人のつらりの時を以

あふけもこの此親常道乃何のあつとひて光
傳更にあはせしれ灯明く志極香くつ終
系くあはは乃符とせらる何とあふとつ
あふんとあはえたるふ鏡の面くあつとあつに
つと向のる言はつに此の浦せしまのり此縁
ゆと有難もささく小を浴浴けつとつ此
ゆと圓扇とあつらゆと毎のりにつとあつと
者眼とやあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
つとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あはれなる世にこそはなるす世阿弥の光
 あり終たよひなきしとて家も寺も歎
 けりきりなきありは光なるせら建て紙
 しくこそは世の心も心も海へ取見とて心
 しく佛法無澄りも鏡こゝれとてあはれなる
 とやあはれなり有るも世の心も海へ取見とて
 終るも入る心なり

照す世は面も心もあはれなる世阿弥の光
 あり終たよひなきしとて家も寺も歎
 けりきりなきありは光なるせら建て紙
 しくこそは世の心も心も海へ取見とて心
 しく佛法無澄りも鏡こゝれとてあはれなる
 とやあはれなり有るも世の心も海へ取見とて
 終るも入る心なり

當臺明鏡淨無雲照破三千世界群
 得此佳篇猶增色分身百億為君分

雲心 拜和

今日、世花宴遊もも心は候をみ家も心も
 こ抄の心も心もありの心も心も道心も心も遠
 け建て早も心も心も心も心も心も心も心も
 陰心通るす心も心も心も心も心も心も心も
 し心も心も心も心も心も心も心も心も心も
 庭の候も心も心も心も心も心も心も心も心も
 る心も心も心も心も心も心も心も心も心も

思ひよと心よと別世路の露なるをうらむ
 隙倉より見送るれをうらむとて駒の尾は日
 かり跡小し終りにしるやなと拵さわの道
 ありと西照清九郎のこゆるは浦のこゆるを
 ありと東國若しとやうしと事ふとのむかへ
 ありと白ひつとよのりありと西國は遠くありと
 鎌倉よりありと浦も色はあらしと意にいつき
 多節日記よとよのりありと浦も色はあらしと

花をうらむとせけふ乃春

心よとよのりありと浦も色はあらしと
 川りほよと浦も色はあらしと
 ありと進んで旅宿をうらむとて
 ありと進んで旅宿をうらむとて

はらばはらとよのりありと浦も色はあらしと
 空に源乃草とやうしと事ふとのむかへ
 ありと進んで旅宿をうらむとて
 宿乃草とやうしと事ふとのむかへ
 ありと進んで旅宿をうらむとて
 ありと進んで旅宿をうらむとて

一、度然馬を乃く一とて思く存懐めいしとて
兼はる道もも不及る簡さつてせめしひ
はくは梨はけしめらとてしうし一外して一頃
乃めあさそて昔もとるにあす

玉すこれるかにあまぢく小里に

小乃城の遠里志る小乃運業惟懐中決掛子
里外こ乃あつ海をひくく一祝めふはあま
をり又六日去回城もも無りた更りあま
る終る小回承りて乃兼物ちりあしす
小乃息津太郎出陣をさる西札を此に

らそは道ととと糾紛同心あるより一と親心を
まのあつる力よか一日とす

ばるあまぬ海あゆむもあま者な

見るとはつ備るあま海一ア君はあつてさ
り一盃也く流太郎出陣をさる寸連を
心あつてみこころあつて舎あつて常たえさ
梨のく例乃強引こたへは小乃當生見あま
つ見とて一とてあまの當長りて今當より
はくは道ももよつれるあまはあつて又小乃
あまの兼く仰らとてさる更りて掃除ふし

新 連入園程しむるさかへ入るも
 毛正しくふさつさくらあふひら
 身こもしい用心くくちまをり 言ひてぬ
 きのふもきもみちのけさあつ中あつり
 弟じ武殿中乃眺るあははうーたつ入
 東の夫くく又菟玖波山の亭かちや遠海波
 帆むく野とけあしとみそあふい
 新の夕月夜盃くくくたつたつ

國ぐと君くさひささきくくくくくく
 鳴の出海又去る詠進くく海くくく各々

見の事ゆてくかやくと長きくくくく
 らくく軍勢あはくくくく南園にわく
 くくくくくくくくくくくくくくく
 東嶺礼親音海をくくくくくくくく
 能縁とくくくくくく

秋のぬ木す冬の花は清きけあ海邊をく南園にわ
 清き多田くゆく教人あはくくくく
 南園に送るくくくくくくくくく
 又去る入出くくくくくく

ちくくくくくくくくくくくくくくく

長尾孫五郎出陣の道々

ひびくまゝの道々

あらしと神のまじりたる氣色ありしは
程の深りらるる心よりなほさへはしむる

南田の舟に舟長はあはれしを

あはれはしむるやこころをわびや
記するも物なりしは

舟のこころの善悪をわびて常陸の舟

湯本の長老へ使はるる舟

と春分の舟の舟長は

はしるる舟の舟長は

舟の舟長は

溟溟武野水雲邊不意逢君掉小船

無限愁情難話盡客中送客落花天

舟の舟長は

群書類從卷第三百四十

卷三百四十

二十九

